

研究結果

「日本と韓国との戦争観の比較研究」というテーマで研究を進行しているが、なかでも「日本では文禄・慶長の役(韓国では壬辰倭乱)をどのように認識してきたか」について焦点を絞り、研究成果をまとめた。以下、その概略をまとめておく。

日本歴史上、古代の白村江の戦い、中世の蒙古襲来、近世の文禄・慶長の役、近代の日清戦争から太平洋戦争までといった一連の対外戦争の中でも、文禄・慶長の役は他の戦争とは異なる特徴がある。つまり、日本最初の海外征服戦争であり、日韓両国の歴史や文化、ひいては東アジアの国際関係に多大な影響を及ぼしたのが、まさに文禄・慶長の役なのである。

戦争とは時代状況の中で記録化、虚構化され、後代には一つの概念となるが、文禄・慶長の役についても近世社会に「朝鮮軍記物」と呼ばれる作品群が現れた。その中で島津家の活躍を記録した『征韓録』、長編軍談として刊行された馬場信意の『朝鮮太平記』と姓貴の『朝鮮軍記大全』、川口長孺の『征韓偉略』などがそれである。それらには朝鮮は神功皇后の三韓征伐以来の朝貢国であるという観点が貫かれており、その線上で朝鮮の無礼を糺し、武威を振るった太閤秀吉を崇拜する論理が成り立っているといえる。やがて近代に入り、明治政府による秀吉の英雄化とともに、文禄・慶長の役も秀吉の大陸征伐という遠大な野望を実現するための歴史的な事件として位置づけられていくこととなる。

一方、戦後、文禄・慶長の役に対して批判的な観点を提示した滝口康彦の『朝鮮陣拾遺』という短編小説が現れて以後、日韓両国の交流が活発化するにしたいがい、様々な文禄・慶長の役にまつわる中長編小説が刊行されるに至る。たとえば、姜魏堂『生きている虜囚』、司馬遼太郎『故郷忘じがたく候』、遠藤周作『鉄の首枷』、森礼子『三彩の女』、宮本徳蔵『王使』『虎砲記』、小田実『民岩太閤記』、神坂次郎『海の伽琴』、長谷川つとむ『帰化した侵略兵』、荒山徹『高麗秘帖』、宮本徳蔵『海虹妃』などが現れるが、それらには近世とは異なる戦後日本の戦争観が読み取れる。つまり、文禄・慶長の役についての歴史や英雄的な活躍をした加藤清正のような武将を描くのではなく、日韓文化交流史における象徴的な人物、即ち沈寿官、おたあ・ジュリア、沙也可(朝鮮名は金忠善)、或いは庶民を主人公とし、戦争がもたらした悲惨さを強調しながら反戦を訴えている。とりわけ、文禄・慶長の役から400年が過ぎた1990年代以後からは、沙也可ひとりを主人公とした作品が次々と創作される。日本の植民地時代においては沙也可の末裔は日本人からも朝鮮人からも差別された存在であったが、今日に至っては文禄・慶長の役についての認識の変化を象徴するかのようにより、両国関係の一接点として注目されることとなったのである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等) :

題名：日本では壬辰倭乱をどのように認識してきたのか。

発表者名：崔官

会議名：景園大学アジア文化研究所第12回定例学術大会「東アジアの戦争とアジア主義」

日時：2008年5月6日

場所：景園大学

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等) :

題名：「日本では壬辰倭乱をどのように認識してきたのか。」

発表者名：崔官

論文掲載誌：『アジア文化研究』

掲載時期：2009年2月

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等) :